

第 6 期宇治市生涯学習審議会 会議録

名 称	第 6 期宇治市生涯学習審議会 第 7 回審議会			
日 時	平成 26 年 6 月 13 日 ( 金 ) 午後 3 時 00 分 ~ 5 時 00 分			
場 所	生涯学習センター 2 階 一般研修室			
出席者	委 員	○ 奥西 隆三	○ 向山 ひろ子	○ 清水 桂子
		○ 門脇 洋子	○ 弓指 義弘	○ 六嶋 由美子
		○ 迫 きよみ	大井 悟	木村 孝
		杉本 厚夫	× 桑原 千幸	○ 長積 仁
		○ 森川 知史	○ 小宮山 恭子	× 西山 正一
	事 務 局	○ 藤原 千鶴 ( 教育部次長(兼)生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長 )		
		松崎 満 ( 教育部次長(兼)教育支援センター長(兼)一貫教育課長 ) 代理出席 姫野裕美子 ( 一貫教育課指導主事 )		
		○ 安達 昌子 ( 生涯学習課主幹 ( 兼 ) 生涯学習センター主幹 )		
		○ 今莊 真樹 ( 生涯学習課主幹 )		
		西村 比呂支 ( 生涯学習課生涯スポーツ係長 )		
		北池 顕子 ( 生涯学習課事業係長 ( 兼 ) 生涯学習センター主査 )		
		○ 前田 紘子 ( 生涯学習課生涯学習係長 )		
		○ 村上 信之 ( 生涯学習課生涯学習係主任 )		
○ 粕谷 祐次 ( 生涯学習課生涯学習係主任 )				
傍聴者	0 名			

会議要旨は、下記のとおりである。

・第 6 回審議会の会議録について

訂正がないことを確認し、ホームページで公開する。 委員了承

(事務局)

1. 報告事項

・「宇治市生涯学習人材バンク」の利用状況について

利用状況把握のため、前回調査時(平成 25 年 5 月)以降の利用について調査を行った。毎年実施している登録講師向けアンケートは、今回登録講師は 101 件を対象に行い、回答率は 70.3%であった。また、利用状況と利用者のニーズをより正確に把握するため、平成 25 年度より利用者に依頼内容・感想等を書いて提出してもらう、利用報告書の運用を開始した。平成 25 年度は 12 件受理している。これらを合わせて集計した結果、利用率は 33.8%であった。今後とも、登録講師・利用者双方からの情報を収集し、より正確な利用状況の把握に努めたい。

(委員長)

利用率についてはこれくらいだと思う。うまく機能するようさらに工夫してほしい。

(委員)

どのようなジャンルの講師の利用が多いのか。

(事務局)

利用報告書は公的機関が多く、保育所から子ども向けに紙芝居や人形劇などの講師についての問い合わせがある。また、町内の子ども会で利用するにあたっての問い合わせや、ホームページを見られた他市の小学校からの問い合わせもある。

(委員長)

利用はあったが、講師や利用者からの報告がない可能性もある。

(事務局)

内容はマッチングしたが、日程が合わなかったという連絡もあった。

(委員)

スポーツ関連で登録されている方については、学校からの依頼により講師をする場合もある。

## 2. 協議事項

### ・ 公民館について

(委員長)

前回から議論を行ってきた公民館のあり方について、生涯学習審議会として意見をまとめていきたい。

(事務局)

「宇治市の公民館の今後のあり方について(指針)-案-」について説明。昭和 53 年、市民会館に「宇治市公民館」を併設。その後木幡、小倉、中央、広野の順に公民館を開館。その後、国が社会教育に力を入れていた時代から、生涯学習振興の時代になり、東日本大震災後は再び社会教育を活性化する動きが出てきた。震災後の社会教育は、社会教育と地域コミュニティを同列とし、両者を活性化するため、住民自らが企画・運営する力を身につけることを目指した。平成 25 年に、住民の力を引き出すことを目的として「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」が創設された。委託事業費は 1 件当たり 100～200 万円。本市の社会教育の変遷は、国の動向と同様に、行政が公民館を中心として直接社会教育を行っていた時代から、自ら学ぶ市民を支える生涯学習へと移行した。

## 第 6 期宇治市生涯学習審議会 会議録

公民館運営審議会の第 3 期のまとめでは、平成 9 年～14 年に、公民館・生涯学習センター・コミセンなど場所がどこかではなく、どこでも社会教育・生涯学習を展開することができる必要があると述べている。10 年以上経過しており今日的ではないが、どのように市民が学習機会を獲得するか、時代を超えて普遍的な内容が含まれている。特色ある公民館をめざし、平成 24 年より各館でテーマを決めて、特色ある独自事業を展開している。教育振興基本計画で重視しているのは、仕組みや体制づくりを進めることとしている。

今日の審議会では、今後の公民館のあり方についてご意見をいただき、今回までの意見をもとに指針としてまとめたい。また、今期のテーマである社会教育での具体的ななしかけづくりについても議論をすすめていきたい。

(委員長)

指針案の 5 について議論したい。ご意見ございませんか。

(委員)

貸館ということで、サークルの指導者という形で、11,000 円ほどの講師謝礼をもらっている人がいる。コミセンのサークルと似た感覚であるが、公民館でも金額的なことについてはどうなのか。

(事務局)

宇治公民館には約 30 のサークルがあり、会費があまり高くないよう館長から指導があり、2,000～3,000 円を上限にされているが、その会費の中から講師にいくら支払っているかは把握していない。講師謝礼が高額となれば、それはサークルではなく教室になるが、その部分は歯止めをかけている。

(委員長)

これがコミセンなら問題はないのだが。

(委員)

公民館では、謝金は 2,000～3,000 円のイメージである。10,000 円をオーバーすると、サークルを超えて教室だと思う。

(委員長)

謝金の話が、公民館とは何かということにつながる。サークルを運営していて、講師に謝金を払わないというわけにはいかないと思うが、公民館でされるのはおかしいのではないかという意見もわかる。

(委員)

講師に来てもらってみんなで学ぶことだけをしたいのなら、公民館でなくてよいと思う。公民館で講義をする意義があるなら公民館ですればよい。では、いったい何をもって、講義やレッスンを行うことについて地域で公民館を使う意義があるのかということである。

(委員長)

レッスンをすることが、地域に還元されていけばよいが、個人が楽しむだけで終わっているのであれば、ちょっと違うのではないか。公民館でルールを決められているのかどうかである。

(事務局)

毎年 1 回の登録サークルの更新時に、どのような学習をしているかだけでなく、地域でどのような貢献・活動をしているかを書いてもらっており、純粹に学習しているところと、いろんなところに出かけていくための練習をしているところとがある。

(委員長)

どのように活動しているかのデータはあるが、どのように線を引くかということは議論になっていないようである。

(委員)

公民館サークル連絡協議会(公サ連)や公民館利用者連絡協議会(公利連)に入らなくてもよいという話を聞いたことがある。宇治公民館では、協議会に入っていれば部屋を無料で貸してもらえるが、入らずに貸館料を払って活動することで、公民館まつりにも出なくていいということである。昔の話なので今はどうなっているのか。

(事務局)

高齢や子育てなどにより役目を果たせないため、公サ連を抜けられることがあると聞いており、宇治公民館の公サ連は組織率が高く協力体制もある方であるが、中には抜けられる方もいる。建物を有料と無料で使い分けているのは、宇治公民館と中央公民館である。宇治公民館は、同じ建物を市民会館と呼び、市民会館利用は有料で公民館利用は無料である。中央公民館は文化センター機能で利用するなら有料である。他の 3 館は、公サ連登録団体の他、地域の町内会活動や学校の福祉活動、民生委員活動の利用を、無料でされている。

(委員)

公民館という制度が、だんだん教育でないような雰囲気になってきている。昔では考えられなかった謝金やサークル会費という話が出ているが、その辺りを指導しない

と、新しく公民館という看板を上げて、単なる貸館になってしまう。それを行政としてどうするのか。

(委員長)

行政としてこうあってほしいということを審議会として挙げるべきである。そもそも公民館とは、というのを一度考える必要があるところへきていると思う。生涯学習ヘシフトしてきた流れが、公民館にも大きく現れている。やはり社会教育を充実していかなければならなくなってきたており、生涯学習も大切ではあるが完全に傾いてしまっていることにどう歯止めをかけるかが問題である。

(委員)

音楽連盟に加入しているコーラスグループで、活動場所が公民館のところもあるが、公民館サークルである自覚をもっているのか疑問である。単に地理的なものや集まりやすいということだけなのか。

(委員)

集まりやすい、備品を預かってもらえるなどであると思う。楽器を使う活動であれば楽器は持ち歩き、譜面台は公民館に置いておくなどしていると思う。

(委員)

絵画サークルでもイーゼルを置いている。

(委員)

ゆめりあうじができた時、女性を育てるいろいろな講座があった。私は、そこでいろいろな講座を聞き、不登校の子を支援するものを作りたいという思いでみんなが集まって活動するなどして、女性を育てていただいたという思いがある。また自発的にNPOやいろいろな団体で活動している友達もいる。地域を担ってくれる人が少ない状況であるが、地域を盛り上げようとしたときに、一番集まりやすいのが公民館であるとすれば、そこで地域が活性化するようなものを作ってほしい。周囲に話を聞くと、そのようなものは全くないとのことであり、もったいないと思う。

また、研究大会で氷見市の方が、青少年健全育成協議会(青少協)や子ども会の事務局が公民館にあるとの話をされた。各団体が公民館にあるというのは、学校と各団体をつなぐためのネットワーク、支援づくりにはとても便利でありベストであると思う。木幡の青少協事務局は中学校にあるが、それは中学校の先生に動いてもらうことになり、多忙になってしまう。でも公民館にあれば、もっとみんなが行きやすくなって、違う方も入ることができる。そのように公民館を活用してほしい。学校も何かしたいと思っても、先生が多忙になることを考えると、一歩引いてしまう。

(委員長)

個人でサークルをしている場合も含め、地域にどれだけ還元しているかが気になる場所である。公民館には、人材を育てる機能と、活動している人たちを束ねる機能があればいいという意見であると思うので、公民館のあるべき姿の一つの提言としてまとめていきたい。

(事務局)

特色ある公民館へと、行政としても何らかのしかけをしていかなければならないということで、各公民館で独自事業を展開している。中央公民館では宇治鳳凰大学が一番大きな集団であるが、そこで学んだ後も活かせるようにと考えている。宇治公民館では、「宇治の形・学びの広場」で、宇治の歴史を学ぶため、歴史分野とのコラボによる連続企画として事業をしている。また、木幡公民館では、「親と子のちょっとおしゃれな木幡倶楽部」が人気で定着しており、小倉公民館では盆踊り大会、広野公民館では地域の方が演じる人形劇を予定している。全体の利用者まで広がるかは難しいところであるが、行政としてしかけが必要という意識はしている。

(委員)

広野公民館の、京都文教大学協力の地域生涯学習支援事業とは何か。

(事務局)

広野公民館の人形劇のことである。

(委員)

生涯学習になっていて社会教育になっていない公民館サークルは駄目だと思う。サークルで講師を呼ぶのも、一般の方々向けに講座をするためであればよいが、自分たちの学習のためだけに講師を呼ぶのはよくない。公民館サークルは地域貢献が前提でデューティーでなくてはならず、サークルだけで楽しむものではない。公民館サークルは閉じられているというのが一番問題である。

生涯学習だったら、例えば人形劇をやってみてサークルをつくるというところで終わってしまうが、本当は、教室からクラブへ、クラブから教室へという循環型を基本としなければ、社会還元ができないということである。公民館は、様々な組織をコーディネートする、そういう機関でなくてはならない。青少協は青少協、団体は団体とそれぞれバラバラである。それをコーディネートしたり学校とつないだり、その役割が公民館にあって、一番必要なものである。

文部科学省がすすめているのは、まさしくそういうことで、組織がバラバラに活動するのではなく、コーディネートされてより多様なものを受け入れ、新しいものを作り出していくことである。例えば、学校地域支援事業にしても、地域と学校とを結びつける人がいないからできない。その核になるのが公民館になるのではないか。学校

## 第 6 期宇治市生涯学習審議会 会議録

と地域が公民館を通してつながり、そこで子どもたちの現状を知って、学校をどう支援していくかを考える、そういう役割をもつべきだと思う。

(委員長)

今後の社会教育で、社会教育委員がどういう役割を果たしていくのか、そのための仕組みをどう作るか、同じような問題のように思う。

(委員)

公民館を運営している職員は、どう意識されているのか。その職員に思いがあれば、うまく回るのではないか。

(事務局)

公民館主事や社会教育指導員を各館配置し、公民館運営協議会委員を委嘱して、行政主導で公民館を盛り立てていた時期のことだと思うが、社会教育委員が住民を引っ張っていたのは、昭和 50 年代である。その後コミセンや生涯学習センターが開設されて、生涯学習の拠点を生涯学習センターに置いたことにより、公民館主事を引き上げ、生涯学習センターに職員を集中させ、出前のような形で公民館事業をするイメージであった。現在、公民館に常時いるのは、公民館長と生涯学習指導員の 2 名である。

(委員長)

本当にこれでよいのか、もう一度問い直さなければならない時期に来ているのではないかという意味で、公民館を考え直すというところについて、審議会より提案できればと思う。ただ、昭和 50 年代に戻すことが必ずしもよいとは限らない。

(委員)

公民館費が 1,400 万円くらい下がっている。

(事務局)

木幡公民館の屋上防水と木幡、小倉公民館の耐震補強工事が完了したためである。

(委員)

工事が無い時の金額と同じ額ということでよいか。

(事務局)

よい。

(事務局)

宇治市だけが独自に違う方向ですすめるのは難しいと思う。全国的には、コミセン

というより、これは何だろうという施設がたくさんできており、どこが公民館なのかわからなくなっている。宇治市は宇治市として、今回議論したことができるよう、審議会として提案したい。

• 今期の研究テーマについて

(事務局)

宇治市教育振興基本計画の3つある目標のうち目標2、「調和のとれた子どもの『育ち』を支える『家庭・地域の教育力』を向上させる」とあるとおり、調和のとれた子どもの育ちを支えるために大人たちがどうしていくのか、家庭地域の教育力を向上させるものである。施策は3つに分かれており、施策9で家庭の教育力の向上支援を挙げている。社会教育が関連するのは、推進施策と主な取組の「家庭教育力」を高めるための支援であり、親育てのために地域がどのように関わっていくか、行政の支援について施策を挙げている。目標は、家庭で話し合う機会の割合、家庭学習の定着度の割合、朝食を毎日食べている割合について指標値を挙げている。

施策10の推進施策と主な取組では、青少年健全育成活動の推進が挙げられており、大人が子どもの育ちにどう関わっていくのかという視点での施策に変わっている。目標は、各中学校ブロックで開催する地域懇談会の平均参加人数、児童生徒が地域活動に参加した割合、夏休みジュニアリーダー養成学習会に参加した小学生が中学1年生でリーダーとして参加した人数について指標値を挙げている。施策11では、学校教育と社会教育のつながりの強化を挙げている。ここが、今回の振興基本計画で大きく取り上げた点であり、社会教育、学校教育、生涯学習が別の分野となっていたものが、複数の分野にまたがった施策として挙げられている。

(委員長)

今回は学校教育を支えるものとしての社会教育のあり方をまとめていきたい。教育振興基本計画は、それを考えるための絵であって、本当に動くのかというところであるが、学校教育と社会教育とが連携をとれるような場をつくらないと動かないと思う。審議会では、学校教育を支えるものとして社会教育がこのように動いてほしいというものを提案し、一步踏み込んで仕組みづくりを進めたいと思う。実際に、いろいろな団体が学校へ入り支援をしているが、団体をコーディネートするようなことが機能として必要だと思う。

(委員)

10年以上子育てをしてきて、社会の目は本当に厳しく、「ルールを教えていない」「マナーを守らせないといけない」と言われたことがある。しかしそこに、単純に小さな子どもに対する愛というものがない。少しでも道を外れたら、教えたり叱ったりするのが大人の役目だと思っている人が多いと思うが、育ての中にも遊びの部分や、ある程度のはみ出し枠があって、温かく見守る目が必要だと思う。



(委員長)

大人の自己肯定感と子どもの自己肯定感との問題だと思う。問題があってもどこまで容認できるか、そのままの形で受け入れて認められるか、それが地域の中にどれだけあるかというところである。大人が自己肯定感を持ってないと子どものそれが育たない。

(委員)

許容範囲や肯定感がないと子どもが甘えたり、本音を言えないと思う。大人も信頼関係があつてこそ怒ることができるのではないか。「これは駄目」「ちゃんとさせないと」ということだけであれば、形だけになってしまう。その中にどれだけ愛が含まれているかが大事だと思う。

(委員長)

その通りだと思う。地域にどれだけ根を張れるものをつくるのか、その視点は大事だと思うので、審議会で提案していきたい。

(委員)

愛が必要だということはよくわかる。朝、登校を見守っていると、ある男子小学生にいきなりキックされた。今度は道路の反対側で立っていたら、道を横断してきてキックされたので、危ないと思い学校に電話して注意してもらった。しかし、先生が怒っても全然聞かず、今度はカツラといって頭を引っ張りに来た。困ったと思ったが、愛があるように対応を変えたら、そのうちにハイタッチができるようになったり、通学途中にサッカーの話ができるようになったり、すごい進歩があった。また、大型スーパーのゲームセンターで会ったときにも声をかけたが、何でここに来ているのだろうと感じていたかもしれない。その辺りから関係が変わってきたのだと思う。何が途中で変わったかということ、子どもから見て同じ目線にいたのだと思う。一方で、その子の親のことを考えると、家庭教育と地域の教育とをうまくつなげていくのは難しいと思う。

(委員)

地方紙にも掲載されたが、夜中の 2、3 時に、地元外の子どもの公園に来て騒いでいたため、入口にチェーンをかけ入れないようにしてしまった。地域住民は、睡眠障害や小さい子どもがいることで困っているのに、警察は、迷惑はかけているが何も悪いことはしていないとイタチごっこで、結局チェーンで入れないようにした。それは、愛がないと思う。愛があつて話し合いができれば、解決していくと思うが、現状は地域でシャットアウトしてしまっていて、コミュニケーションが全くない。自分の家庭平和だけを考えると、結局は自己防衛になってしまうと思う。

(委員長)

学校教育の中で、家庭教育が抱えている問題をどう扱っていくかが難しい。家庭の中に踏み込んでいくことはなかなかできない。行政側が問題を抱えた家庭に対する支援は、きっかけづくりという形であって、子どもたちの家庭のあり方については扱いようがなく、個人主義で閉ざされた形になってきていることが大きな問題であると思う。社会教育としてそれをどう変えどう関わっていけばいいのか、議論が必要である。

(委員)

昭和の終わりごろにPTA会長をしたことがあるが、その時から地域の教育力が問われている。

(委員)

去年のハロウィンの時に、子どもが団体になって近所を一軒一軒回っていた。ハロウィンは日本ではまだ定着していないものなので、私自身も意識しておらずお菓子も用意していなかった。でもそれを見て、自分の町内を誇らしく嬉しく思った。社会教育の一番小さな核は家庭であり、町内の活性化や大人同士のコミュニケーションでもあるのに、私の町内の総会は30分で終わってしまう。子どもに対する愛情がある町内にしたいと、子ども・子育て会議に提案しようと委員に応募したが採用されなかった。町内というのをターゲットにしてほしいと思う。

(委員)

ハロウィンの近所めぐりの呼びかけ人は誰なのか。子どもが自発的に行ったのか。

(委員)

英語教室の経営者が主導されていて、お菓子を用意しておいてほしいとの依頼がくる。その地区には英語教室の先生がいるのだと思う。

(委員)

子どもと地域の大人との対話があるのは、良いことだと思う。

(委員)

後で子どもたちのお母さんが、一軒一軒お礼に行っていた。

(委員)

町内の前に向こう3軒両隣。町内は回れなくても隣の家に行くくらいはあってよい。

(委員)

私の町内では、ある年地蔵盆をやめようと回覧が回り、その結果地蔵盆がなくなっ

た。これまでずっとあったのに、発起人がやめようと案を出し、みんなそれに反対してまでやろうということにはならなかった。そのように残念なことになった町内もある。

(委員長)

京都市内では子どものいない町内があり、何で地蔵盆をするのかという話になっている。そのような情報が出ると、やめてしまおうという動きが出てくる。

(委員)

子どもが多い町内会は親が若く、親同士のつながりがあるので活性化している。新聞で、夏祭りの記事を見たとき、活発でいいなと羨ましく思った。一方で、子どもがいない町内会は、役員が高齢になってきている。以前は70歳定年があったが、今はそうすると役員がいなくなってしまう、集まりが中止になってしまう。子どものいないところにはいくら働きかけても実らないのではないか。

(委員)

働きかけることは、何らかの形で実りがあると思う。

(委員)

私の町内も子どもがいないが、地蔵盆では、里帰りしてきた人の子どもを受け入れて行っている。親同士も幼なじみで同窓会のようなになるので、多くの親が帰ってくる。今年はずっと単身赴任していた夫が町内会長になった。文化部の担当にあたったが、何をしたらいいのかアドバイスを求められた。以前開催した茶話会では、固苦しくなってしまったので、会場を予約し1,000円のケーキセットを用意したところ、男性4名を含め、29名の参加希望があった。当日は、綺麗に着飾っている人もおり、主人もケーキや飲み物の注文を取ったりして、楽しそうに帰ってきた。

(委員)

中学生から、地域に対する要望がないかという話を聞き、地域の懇談会で発表したいと思っている。懇談会も講演会形式だと、一方通行で終わってしまうので、10人くらいのグループに分け、井戸端会議のような形で、地域の課題を話し合おうと思っている。地域の教育力を上げるには、諸団体が横の連携を取り、いろんな意見を共有しないといけないと思う。結論を出すというものではなく、いろんな意見を出し合う井戸端会議のような形にして、課題を掘り起こそうと計画している。

町内では、期間限定であるが、ラジオ体操を子どもだけでなく大人も参加するよう回覧があった。参加賞を今年から大人にも渡すなどし、一体どれくらい参加してもらえかわからないが、そこで顔なじみになることも多いと思う。

宇治市福祉サービス公社の「頭すこやか講座」に参加しているが、そこで出会った町内のご夫婦の要望で、町内の集会所で大人の居場所づくりをしようということにな

った。そこで学んだことを、茶話会や大人の居場所で、トランプや将棋で遊ぶその前に、お茶を飲んで何かしようという話に持ち込めたらいいと思う。現在、今秋くらいから始めようと話し合っている。

(委員長)

町内の連携をどこまで強くするかということである。そこへ行けばたくさん人がいて、どんな話でもいいから雑談できる、そういう場が必要だと思う。そういう人たちが温かい目で子どもを見守るという形になれば一番よいが難しい。核になる人がいて人が集まれば、そのしかけがうまくいくと思うので、審議会としてまとめていきたい。

(委員)

文部科学省がすすめている学校支援事業や放課後子ども教室、コミュニティスクールのようなものは、宇治市ではどのように取り組まれ、評価はどのようにしているか。

(事務局)

学校支援地域本部事業は、数年前に補助金が出たことで核になる人を確保できたが、現在は補助金が終了し、市の予算もついていない。また運営をボランティアだけで行うということで、行政からの支援が難しい。現在、東宇治中学校で、地域の方が学校に入って活動されているが、その1校のみでそこから広がりが無い状況である。放課後子ども教室は、北槇島小学校1校が活動している。コミュニティスクールは開設していない。

(委員)

このような活動は、本来なくなってしまうといけないものである。1校で活動してうまくいかなかったら原因や対策を考え、モデル校を作って広げていくのが文部科学省のねらいであるのに、補助金が終われば事業も終わってしまうという傾向にあるのはどうかと思う。学校と地域を結んでいくという文部科学省の社会教育へのメッセージであり、社会教育も学校教育と一緒にあって、何が継続できなかった原因なのかを追究する必要がある。そして、審議会はそのしくみの評価をするものだと思う。全国で講演しているといろいろな事業について失敗例もあるが、新たに増えているところもある。

否定的な意見になるかもしれないが、地域の教育力の向上が本当に必要なのか。社会教育委員は必要だと思っていても、それを実際に活用する地域の人が必要だと思っているかどうか。行政が言っているから、世の中がそうなっているから必要なのだろうと思っている程度で、意識のギャップを感じる。また、その必要感も地域によって全然違うと思う。ハロウィンの話でも、子どもが来てよかったという人もいれば、変な集団が来たという人もいるだろう。一律にはいけないと思う一度原点に立ち返り、本当に必要なのかをはっきりさせないと、理念だけで活動しても現実化しないと思う。

(事務局)

小中学生のアンケートでは、地域活動に参加してよかったという声がある。地域の団体さんも、歓迎する姿勢である。

(委員)

参加した人へのアンケートではないのか。アンケートではそういう答えになる。

(事務局)

参加した人もそうでない人も、無作為抽出で行っている。

(委員)

学校地域支援本部は一校と言っていたが、学校によってはボランティアがたくさんある。近くの学校では、園芸ボランティアなどたくさんある。

(事務局)

文部科学省の施策ということであれば、一校である。行政が情報をうまく捉え切れていないものや、補助金の要件に合わず行政が対応していないものもあると思うが、東宇治中学校でもお金がないなりに工夫をして活動されている。

(委員長)

若い書き手の本で、「無業社会」というものがある。15歳から35歳までの間で、学校も行かず就労もしていない人が全国で200万人もいて、今後子どもが減り働き手が減っていくのが目に見えているのに、若い人が働かなくなると一体どうなるのかということが書かれている。人と関われない、関わりたくない、どう関わっていいかわからないという人が、どんどん増えていっている。学生にコミュニケーションの話をしてコメントを書かせると、関わらないといけないのかという意見が多い。本当は、自分の後ろでたくさんの人が動いてくれていて、自分は関わっていないつもりでいるだけであると伝えても、関わらなくて済むならそれでよいという考えである。人と全然関わらなくても何もかもが整い暮らせる時代を作ってしまった。そういう人たちが大人になって家庭を作っていくと、まさに「何で町内会でつながらなければいけないのか」という話になる。そこが根本問題であり、考えなければならない。

(委員)

一方、そうでない現象も起きている。今、パブリックビューイングに多くの人が集まる。サッカーワールドカップの試合を見に来た人になぜ来るのか聞くと、そこでパフォーマンスをすることで、一体感を味わっているという。現代社会が孤立化しているから、そこに逃避しているのだろう。本当は、一体感や人間のつながりを、近所付き合い合いの中で感じられるようになれば一番よいが、日常の世界ではなく非日常の世界に求めてしまっている。しかしそれは実がないことではない。一人で生きていける

とは思っていないし、人とつながってほしいという気持ちはある。それを非日常ではなく日常の世界に向かせるしかけが必要である。

(委員長)

SNSは、自分が何を食べたかなど、他人にとってはどうでもいいことをアップして、見た人がまた「いいね」というようなものである。それでは人はつながっていないと思うが、寂しさを埋めあわせる代替のものを探して、そういうものがどんどん増えている。つながりを日常で感じるように戻さないといけないが、戻さなくてもいいしかけができてきている。そこが問題だと思う。

(委員)

そこが、今の世の中で起こっている問題の根本だと思う。最近では、SNSで危険なことがいろいろある。まずそれを知らせないといけない。

(委員長)

(人と人をつなぐ)しかけが絶対に必要であるという前提で議論をするのではなく、本当にそれが必要だと思わせるにはどうするかである。

(委員)

必要ないと思っている人がいるというところから出発しないと、議論が空回りしてしまう。

(委員)

赤ちゃんを抱っこ紐で抱いているお母さんが多く、しがみつく力が弱くなって、お座りやハイハイができない赤ちゃんが増えている。また赤ちゃんがお母さんと目を合わせていないことが日常的に起こっている。

教育振興基本計画の対象は教育を受ける年齢であるが、これらを忘れていきなり小学生からというのは手遅れであり無理なのではないかと思う。本当に効果を上げるのならば、0歳児からの親子関係が大切であり、愛されて育てられた子が人を愛し信頼するというものである。お母さんは、躰けることばかり言われて愛することを忘れてしまい、子どもは大人を、みんな怒る人であって温かく包んで抱きしめてくれる人ではないという目で見ていると思う。小中学校の先生に、一度赤ちゃんを見に来よう話をしてもらえないのが現状なので、児童・生徒が入学する前にどう育ってきたかという視点を持ってもらえるよう考えていかなければならないと思う。

(委員)

行政の壁のようなものがないか。国では、就学前までは厚生労働省が、就学後は文部科学省が管轄でありこの壁は大きいと思う。双方で、幼保連携や放課後子ども事業

を始めたりしているが、文部科学省では放課後子ども教室、厚生労働省では放課後のプランというように、どこかで壁を作っているところがある。それをつなぎ、一緒にやっていく姿勢が必要である。実際に放課後プランを学童と一緒にしているところもあるが、事例は少ない。

社会教育でも、その壁に当たると思うので、乗り越えるような政策が必要である。厚生労働省の福祉関係者は、就学前の子どもについては詳しいが、就学後は文部科学省の管轄になるので知らないという。小1プロブレムというのは、そこに断絶があって起こっていると思う。最近では福祉の方から、就学前までの子ども関係者を対象に、就学後の子どもたちの育て方について教えてほしいとの依頼があるが、福祉関係者に就学後のことを話せる人がいないという。宇治市ではその壁を取っ払い、0歳児から一緒に考えていくなど、積極的に福祉関係者と連携する試みが必要だと思う。

(委員)

最近では、知らない土地で子どもを産む人が増え、そこで一人で生きていけると思っていたのが、やはり生きられないと感じるようになり、本当に頼りにする人が近所の人だけになった時に、優しくされた感覚というものは忘れられないものである。その時は無我夢中でも、後で落ち着いた時に、あの時助けてもらったことが今やっとわかったと、お礼に来られる人もいる。その時に温かくしてもらった気持ちというのは忘れられないものだと思う。それを返していきたいという循環が生まれてほしい。

(委員)

人と関わろうと思うと、人に信頼を寄せられないと関われない。しかし今は、幼い時にどこの誰だかわからないおじさんについて行っては駄目と教えなければならない時代である。そこから始まってしまうというのは、本当に何とかしないととんでもないことになると思う。

(委員長)

いろいろなしくみ作りが必要になると思う。次回までにまとめていきたい。

(事務局)

### 3. その他

#### ・平成 26 年度山城地方社会教育委員連絡協議会について

平成 26 年 6 月 19 日(木)午前 10:45 ~ 久御山町中央公民館にて  
当日 9:50 に議会棟前集合

#### ・平成 26 年度京都府社会教育委員連絡協議会について

平成 26 年 6 月 19 日(木)午後 1:15 ~ 久御山町中央公民館にて(同日開催)

- ・平成 26 年度近畿地区社会教育研究大会（大阪大会）について  
平成 26 年 9 月 12 日（金）午前 10：20～吹田市文化会館（メイシアター）にて
- ・平成 26 年度全国社会教育研究大会（徳島大会）について  
平成 26 年 10 月 22 日（水）～10 月 24 日（金）アスティ徳島にて
- ・（仮称）宇治市スポーツ振興計画見直し検討委員会の市民委員公募について  
平成 26 年 2 月の審議会で、平成 26 年度に計画を見直すことについて報告  
委員募集は、市政だより 6 月 1 日号にて  
委員構成は、生涯学習審議会委員 4 名、スポーツ推進委員 1 名、体育協会 1 名、中学校体育連盟 1 名、一般公募 1 名の計 8 名による。
- ・平成 27 年成人式実行委員募集について  
平成 26 年 6 月 20 日（金）募集締め切り  
市内在住、在勤、在学の方で宇治市にゆかりのある方なら立候補可能なので声かけをしてほしい。
- ・平成 26 年度社会教育関連予算の概況について  
総務費 12,382 千円 市民会館運営費  
民生費 20,211 千円 善法・河原青少年センター運営費  
教育費 975,313 千円 社会教育総務費、文化財保護費、社会体育費、  
公民館費、歴史資料館運営費、図書館運営費、総合野外  
活動センター運営費、生涯学習センター運営費、源氏物  
語ミュージアム運営費に分類。  
生涯学習審議会活動費、文化的景観保護推進事業費、ス  
ポーツ推進委員活動費その他社会教育関連事業に充当  
合計 1,007,906 千円

（委員）

大久保青少年センターの事業費は、どの項目に計上されているのか。

（事務局）

社会教育総務費に含まれている。

（委員）

総合野外活動センター運営費が増額されているがなぜか。

（事務局）



大規模修繕工事、災害復旧工事を行うため。

(委員)

源氏物語ミュージアムの予算が増額されているがなぜか。

(事務局)

歌舞伎俳優による企画展実施のため。

(委員)

源氏物語ミュージアムの入館者は増えているのか。

(事務局)

平等院の改修が完了し、市全体に活気が戻ってきている。

(委員)

前年度との違いを備考欄に記入してほしい。

**< 次回の会議について >**

平成 26 年 8 月 5 日 (火) 午後 2 時 00 分から